

「地・人・芸術ー〈芸術と地域〉を問うー」(レジュメ)

金田 晋 (広島芸術学会)

1. タイトルの説明

(1)「**芸術と地域**」について 現代芸術:交通、通信機関の発達によるグローバル化の波。制作の意識、美術館等における企画意識に増幅。受容の姿勢にも同様の傾向→地域からの脱却、地域性の忘却。⇔近年の反省。ゲニウス・ロキ(地霊)。場所の意識。自然、人間、伝統への注目→住民の地域おこし、島おこしの情熱と結びつく芸術プロジェクト。

地域(広島を例に)／広島体験(提題者:金田)／広島 1945年8月6日原爆投下。入市者(推定)35万人前後、9~12万人死亡／広島という都市の壊滅。→2011年3月11日東日本大震災／大津波に東日本太平洋岸の都市、漁村、田畑が呑み込まれる／死者、行方不明者2万人以上。／福島原発事故、放射線汚染による住民の地域からの追放／今まで自明であった土地、「地域」が奪われたとき、人は何をすべきなのか。何をすることができるのか。

(2)「**地・人・芸術**」について メイン・タイトル「地・人・芸術」の典拠／宮沢賢治「羅須地人協会」大正15(1926)年8月16日設立／昼、農作業。夜、農の講義+「農民芸術」講義／講義概要の一節「農民芸術とは宇宙感情の地 人 個性と通ずる具体的なる表現である」→「地 人 個性」／同協会「講義案内」の中の最後「三月中 エスペラント 地人芸術概論」中の「地人芸術」→「羅須地人協会」、昭和2(1927)年3月閉鎖。本タイトルの願い=90年前の賢治の最後の講義をひきつぎたい／地(地域)を取り戻さなければならない。

羅須地人協会開設時「農民芸術概論綱要」→「地人芸術概論」／「農民」=一つの身分・職業・階層→「地人」=芸術家の実存(1)土(労働)に親しみ、世界の「まことの幸福」を仲間と一緒に目指すこと、(2)分業化された芸術ではなく、詩歌も美術も音楽も演劇も舞踊も相互に協働しあう総合芸術を目指すこと=賢治が描いた「新興文化」の理想。

2. 「地域」、地は衰弱している

賢治の時代、日本、あるいは東北の人びとには、今日よりずっと土に近いところに生活があった。／日本=農業国／農のユートピア、モンスーン気候帯／日本人の普遍感情→芸術の活性化／一つのユートピア。「芸術はいまわれらを離れしかも侘しく墮落した、いまやわれらは新たに正しき道を行き、われらの美をも創らねばならぬ」(賢治)／新しい美=「個人から集団社会宇宙と次第に進化する」(賢治)／「地人」への期待。

「地」を原基とする思想／吉田松陰が密航の共謀者金子重之輔(長州藩士)に説いた言葉「地を離れて人なく、人を離れて事なし、故(ゆえ)に人事を論ぜんと欲せば、先(ま)ず地理を觀よ。」／和辻哲郎の『風土』(1931年刊)→近年、その読み直し。

日本の戦前の農業人口は3000万人→1960年代日本の工業化、農業人口(1960年)1200万人、(2000年)200万人。／かつては、好景気の時には、若者たちは都会に出て工場労働者になり、不況になると農村にもどった。「帰農」は、日本資本主義の、「過剰人口を吸収する貯水池」(大河内一男)の役割。／→現代社会、都市と農村の相互補完関係の崩壊／都市住民の無職化／農林漁村の過疎化／休耕地、荒廃地。

3. 芸術による地域おこし

逆転現象、倒錯現象。地が芸術をおこすのではなく、芸術が地をおこす。／→芸術による地域おこし、まちおこし。／地域の活性化のために、芸術家への協力要請。

＜事例＞蘭島閣美術館（呉市管内で、広島県から愛媛県につづく「とびしま海道」の小島下蒲刈島に位置。提題者金田名誉館長）の島おこし／ミカン生産（生産過剰）→タイなどの高級魚の養殖事業（生産過剰）→乾坤一擲、ガーデンアイランド構想（朝鮮通信使資料館や陶磁器資料館、現在収蔵品 2200 点をこえる美術館等の開館→地域活性化のモデル。

東北地方には、自然の逆境をこえて生きる人々の創造のエネルギーがある。民話、工芸、文学、絵画、彫刻、生活等の諸分野で、素晴らしい作品と作家の創出／東北の復興を祈る。そのとき、芸術のエネルギーが力を発揮するであろう。広島がそうであったように。

4. 「芸術、それは自然に付加された人間である。」（フランシス・ベーコン）

時代の節目に技術（芸術）が耳目をひいてきた。フランシス・ベーコンの技術（芸術）観を思い起そう。ベーコンの技術の定義「自然に付加された人間 *l'homme ajouté à la nature*」／ゴッホの弟テオに宛てた手紙「芸術、それは自然に付加された人間である、ぼくは芸術についてのこれ以上の定義を知らない」（1879 年 6 月）／鉾山都市ポリナージュ「煙突、石炭の鉾夫たちの小さな小屋、日中だと、蟻の巣さながらにあちこちあわただしく動きまわる小さな黒い人影」（ゴッホ）→「ものごとを注意深く見る眼をもっているものにとって」、じつに「特色豊か」（ゴッホ）／メルロ＝ポンティ「セザンヌは『芸術のかの古典的定義＜自然に付加された人間＞という定義をふたたび手に入れた』（「セザンヌの懐疑」より）→自然（ここでは地域）への眼差し／セザンヌのキーコンセプト「自然に倣って *sur nature*」。自然の徹底した観察。自然を眺める画家の視覚、あるいは視覚に収斂されてゆく画家の身体を組み込んだ構造／19 世紀末のベルギー、フランス文化圏、20 世紀中葉第二次世界大戦後のパリで、ベーコンの芸術定義が呼び戻されたことは注目してよい／芸術、それは自然と向かい合い、自然を基にして、自然に匿されている力の発見、造形。

5. デカルトはアムステルダムを生きていた。

デカルト、在所不明の抽象的な場における思考ではない。／『オランダよりの帰途』（P. ヴァレリー）／現存するデカルトの肖像画がレンブラントによってではなく、フランツ・ハルスによって描かれていることの幸せ／デカルトはアムステルダムを愛し、戸外に出て「大群衆の混雑の中を歩き回り」（バルザック宛書簡）、「部屋の窓越しに、通行人たちが真新しい雪の中を踏みしめて歩き、皮衣をまとった船員達が、半ば氷結し、半ば融け割れた、白く且つ黒い河氷の上で、信じられない位に上手に彼らの重い端艇を操り移動しているのを眺めるのがたのしみであった。」（ヴァレリー）都市の市民の息遣いを描いたハルスが相応しい／「デカルトは……、巻揚機、滑車、簡単な機械その他、河岸から船艙に、船艙から河岸に貿易の品を運ぶ一切の荷役綱具など、これ等は然した力学的なものを愛し、量的事物を愛する人」／かれにとって魅力ある思索対象。彼は数学的機会に取囲まれていた。

6. 終わりに—広島を例に廃墟からの立ち直りを願って

金田「戦後広島美術年譜」（1945. 8. 6 以後）の作成／広島が全国に誇る昭和前期のアヴァンギャルド鬚光や山路のなきあと、被爆の広島を生き抜いた作家たちの活動／大正・昭和の広島文化の象徴的存在であった広島県産業奨励館（「原爆ドーム」）における芸術事業／原爆ドームの存続＝たんなる物理的存在の残骸でなく、多くの市民たちの記憶の内蔵するモニュメント／文化が力になっている。復興のカギは文化にある。

今日、危機の時代に、私たち芸術学関連学会連合のさまざまなジャンルの研究者が集まって、「芸術と地域」をテーマにしてここ仙台でディスカッションできることは、私たちの今後の研究に大きな示唆を与えてくれると信じています。